

東海第2原発ストレステスト評価結果提出

日本原電に抗議文提出



日本原電が停止中の東海第2原発について、ストレステスト(耐性検査)の1次評価結果を、経産省原子力安全・保安院に提出した問題で、14日に県内の4団体(※)は、同社東海事務所を訪れ「原発を断念していないことを示すものだ」として、濱田康男社長あての抗議や要望書を担当者 handed over.

※「さよなら原発いばらきネットワーク」「東海第2原発の廃炉をめざす県民センター」「脱原発ネットワーク茨城」「茨城県平和委員会」



【日本原電の広報担当者に抗議文を渡す「さよなら原発いばらきネットワーク」の村田さん】

日本原子力発電 株式会社
取締役社長 濱田康男 殿

2012年9月14日
茨城県平和委員会
茨城県水戸市見川5-127-281
電話 029-251-2806

ストレステスト報告書の保安院提出に抗議します 東海第二原発は即刻廃炉にすべきです

貴社は現在停止中の東海第二発電所(東海第二原発)耐性評価(ストレステスト)の一次評価結果を、8月31日に経済産業省原子力安全保安院に提出しました。

昨年3月11日の東日本大地震に際し、一歩間違えれば福島第一原発と同様な状況になっていた事実をどのように考えているのか、理解に苦しみます。

東海第二原発は運転開始から34年もたつ老朽原発です。シュラウドの38ヶ所のひび割れなどの重要構造本体が老朽化しています。配管などの事故も連日のように起っています。圧力容器内の試験片は30年の運転を想定しており、30年分しか入れていません。想定運転期間も超過し、現実の問題として「炉内の把握すらできない状況」と考えざるをえません。

「東海第二原発再稼働反対・廃炉に」の知事宛署名は8月に23万名分提出されました。引き続き多くの地域でとりくまれ、今後さらに多数の署名が提出されます。

また、県内市町村議会における「東海第二原発を廃炉に」「東海第二原発の再稼働反対」の意見書や主旨採択は、23市町村に及んでいます。今後も増えることは明白です。「東海第二原発を廃炉に」「再稼働はするな」というのが県民多数の声です。

茨城大学地域総合研究が行なった原発周辺の住民アンケート(本年6月実施、8月結果報告・東海村、常陸那珂市、那珂市、日立市南部の多賀・南部支所を対象)では、「停止のまま廃炉に」という意見が昨年の32%→46%と14%もアップし、約半数に迫っています。また、「(耐震や防潮対策)の徹底まで再開させない」が28%であり、「再稼働反対」が74%にのぼります。

地元東海村の村上達也村長が「県内で多くの市町村議会が廃炉決議をしている。それを一顧だにせず、評価書を出したのは、県内世論を無視しており、原電は県民の信頼を失った」というコメントを発表(9/1付 茨城新聞)したのは至極当然の事です。

「事故の可能性は少ない」とは言いますが「絶対に起らない」とは言えません。万が一にも事故が起ればどのような状況になるかは、福島原発事故が如実に語っています。30km圏内に106万人の居住者がおり首都も隣です。「事故には責任が取れない」ということに尽きます。

上記の点をかながみ、耐性評価(ストレステスト)の一次評価結果を保安院に報告したことに強く抗議します。また東海第二原発の再稼働を断念し、即時廃炉することを求めます。以上

ストレステストは机上の作文

東海第2原発のストレステスト結果が報告されたと報道されました。

津波対策は1.87倍の補強で13m、地震対策は1.74倍の補強で600×1.74=1044ガルまで対応できるとしているが、何時この補強を完了できるのかわからないにもかかわらず、これで安全であるかのように誤解されてしまう。東海原発は北と南にある活断層の連動の可能性が指摘されているがストレステストはこの対策は含まれていない。予想される膨大な対策費をつぎ込むのはムダ遣いというほかありません。

(「土浦平和の会ニュースNo. 246」より)

茨城革新懇記念講演会

A A A A A A A A A A
いまこそ憲法生かす時

改憲は日本をどこにみちびくか

講師 田村 武夫 茨城大学名誉教授



民主党政権の崩壊、政治不信のなか、領土問題であられるナショナリズム総選挙を前に維新の会が改憲「八策」いまこそ問われる国民の選択

日時：10月6日(土) 午後 1:30 ~ 3:00

会場：県立青少年会館 中研修室

新しい日本への道をめざす講演会にぜひご参加下さい。
参加自由・入場無料

平和新聞

2012年9月25日(火曜日)

1997号(毎月5,15,25日発行)

1950年12月16日第三種郵便物許可 発行 日本平和委員会
1部140円 月額400円 〒105-0014 東京都港区芝1-4-9 平和会館
(郵送料月額120円) 電話03(3451)6377 FAX03(3451)6277

平和かわら版

平和新聞茨城版

No. 635

2012.9/25

発行：茨城県平和委員会 〒310-0912 水戸市見川5-127-281
Tel/Fax 029-251-2806 E-mail ibahei@amber.plala.or.jp

「原発事故1年半 鎮魂と希望をめざす全国交流集会 in 福島」 に参加して

日時9月1日（土）

現地見学「苛酷事故を見る・聞く」：福島駅西口からバス4台で、午後1時出発し、飯舘村役場などを訪問し、5時に帰ってきました。

●【感想】

- ① 被災地は「日本で最も美しい村」に選ばれるなど、年間平均気温が10度と大変過ごしやすい環境でした。また、住民参加の村づくりとして、酪農なども盛んに行われて、7年目に入っていました。
- ② 東電と政府は安全神話をふりまき、原発による事故対策も避難計画もやってきませんでした。当初10km圏・20km圏と避難指示を出しましたが、飯舘村は含まれていなかったため、1,000人も避難してきました。その後飯舘村は放射線量が高く（30km圏・40km圏、風雨の関係）、全村避難になりました。1年半が経ち寂れ果てた飯舘になっていました。

日時9月2日（日）

午前10時～午後4時、会場「ホテル福島グリーンパレス」

- ◎ 問題提起「住民運動の諸課題を考える」伊藤達也・筆頭代表委員
- ◎ 「福島からの報告」菅野典男・飯舘村長ほか
- ◎ 「シンポジウム—原発事故1年半 鎮魂と希望をめざして」
パネラー：大槻真一・阪南大学学長、
立石雅昭・新潟大学名誉教授、
◎ 野口邦和・日本大学歯学部准教授、
岩井孝・原研労組委員長

1. 「原発からの撤退」の共同行動の発展

○福島原発事故以来、「原発からの撤退」の全国的かつ各地路地裏での共同行動の発展

2. 野田政権の一連の取り組みは、「3・11」以前への無責任な「回帰」

3. 日本の原発立地のもつ六重の危険

○技術上：本質的に過酷事故を否定できない危険。放射性廃棄物の処分不能の危険。老朽化の危険。○経済上：総括原価方式の危険。必要経費そえコスト計上しない危険。○地質



那珂平和委員会 川又 俊水

上：世界で有数な地震国での立地の危険。○地理上：人口密集地帯への近接・集中の危険。○行政上：国際基準に則った規制機関の不在の下での立地の危険。○営業上：営利優先の運転の危険。（福島原発事故はこれらの危険が一気に潜在化した事故）

4. 「安全神話」宣伝で原発の危険を覆い隠す

○国と電力会社の洪水のような「安全神話」宣伝。「日本では過酷事故は起こり得ない」宣言。

5. 核兵器と原発＝軍事技術の表と裏

○原発は核兵器技術（ウラン濃縮・再処理・軽水炉技術等）のエネルギー。○原発開発は核兵器とセットで進められ、原発開発は核兵器開発の補完的役割を担ってきた。○福島原発事故は「核兵器のない世界」と併せ「原発ゼロの日本」を実現することの重要性を示す。

★ 終わりに

○福島での被災者の健康・生活の確保と賠償、被災地の速やかな復旧・復興を！○福島原発事故の最大の教訓：「原発からの撤退」「核燃料サイクルからの撤退」への合意形成へ。

○国民的対話・議論を広く深く進めることを呼びかけました。



【2010年、「日本で最も美しい村」連合に加盟】

【2012年6月、全村避難から1年1ヶ月後の風景】



[シリーズ] わが街・わか会員

下妻市／青木 勇さん

同じ地に足をつけて
生きる仲間と



昭和23年生まれの64歳。2009年3月31日に38年間の教員生活を無事終了。翌日から下妻公民館に週3日の勤務に。

地元の先輩の誘いによるサプライズ人事でした。月12～13日勤務して3年で任期終了。今年は4月1日より毎日がサンデーの生活になりました。

今日（9月16日）は、下妻公民館主催の「庭師教室」。今年5月から月一回、生徒として講座に通っています。今日の場所は私の母校の中学校。駐車場周辺の広葉常緑樹の剪定でした。20人の生徒の一人として、私も同級生の2人と参加しました。

同級の3人で参加している、というのがミソ。午前中で剪定作業が終了するので、昼食に向かう。向かう先はこれも同級生がやっているそば屋。話は決まっています、たいてい「旅行」の日時と行き先。

庭師で会うのはツキイチ、3人だが、他のいろいろな機会に7、8人から10人程度集まることがある。そんなある時、突然「この前、代々木公園に行ってきたよ。17万人集まって原発いらなあーい、って叫んできたよ」と私が言ったら、一同ア然。「だって福島見てみろよ。腹たって腹立って、黙っていられめえー」と言葉を継いだら納得の顔をしてくれた。

私の仲間はほとんど農家。だから彼らが「TPPなんか、とんでもねえよ！」という時の口調はかなりきつい。

マスコミの影響もあって、私と意識がズレているなあ、と感じることもあるけど、彼らとはなが～い付き合い。みんな下妻の同じ地に足をつけて生きる生活者。少しでも彼らがブレないように、同じ方向を向いて歩いていけるよう、私も、ここで、頑張ります。